

## 精密総合健診（人間ドック）

### 動 向

平成27年度の人間ドックの受診者数は、9,627名（男性5,794名、女性3,833名）で昨年度より184名減少した。平成24年まで1万人超が続いたが、ここ数年、減少の一途をたどっている。健保組合の補助の減少や新施設増加などが、その要因と考えられる。

当協会では、平成27年6月より健保等の費用補助のない個人受診者を対象に「人間ドック会員制」サービスを開始した。会員の特典として①専任医師による診察・結果説明や健康状態を総合的に判断する経年的な健康管理。②お一人おひとりにコーディネーターがつき、健康状態や要望を確認し、健診の予約段階から健診当日、次回健診までの健康サポート。③医療が必要になった方へは、適切な医療機関の紹介。④マリンプルーなど健康情報誌の送付や健康づくり教室やセミナーのご案内。入会金や年会費はなく無料のサービスとなる。

今後も、人間ドック受診者様がより健康で充実した生活を送られるよう支援に努めていきたい。

### 方法と結果

年度別受診状況では、平成19年度をピークに減少傾向にある（表1-1）。中でも60歳未満の女性受診者数が減っており、全体としても男性に比べ女性の減少率が大きい。一方、70歳以上の受診者数は男女とも増加傾向が続いている（表1-2）。5年以上の継続受診者は多いが新規受診者は毎年減少している（表2）。健保組合の補助削減や正規雇用者の減少等で全国的にドック受診者数が伸び悩んでいる中、特にその傾向が女性に顕著に表れていると思われる。

総合判定区分内訳（表3）をみると、「異常なし」、「心配なし」を合わせたスーパーノーマルは男性1.2%、女性3.5%とわずかである。治療中も含めさらに検査や受診が必要な再検以上の区分の受診者は男性64.8%、女性54.8%で例年過半数を占めている。

がんの新規発見を臓器別にみると（表4）、大腸がん11名、胃がん7名、肺がん6名、前立腺がん4名、乳がん4名、肝臓がん2名、食道がん、腎臓がん、子宮頸部がん、子宮体部がんが各1名だった。前年度までと比し、がん発見率が著明に上昇したが、検査方法の変更や疾病構造が変化したからではなく、事後フォローのためのシステム導入により追跡率を高めたことによると考えられる。全国統計と比較して発見率が低かった大腸がんや乳がんも平成27年度は増えたが、この原因も同様と考えられる。前立腺がんは毎年安定して発見されており、PSA検

診の実施率の高さと（表5）、当日に結果説明をしていることが要因と考えられる。一方、胃がんの発見数は例年通りに戻った形である。

年代別の検査データ平均値（表6）では例年と大きな変化はみられないが、リウマチ因子は平成26年10月から検査試薬が変更されたため、低めの値になっている。白血球数は喫煙率が高い壮・中年男性でやや高く、貧血検査は男性で加齢とともに数値が低下するが、女性では50歳代で反転上昇する。腎機能（eGFR）は、男女とも加齢に伴う低下が著明である。生活習慣関連項目（肥満度、腹囲、トリグリセライド、尿酸、AST、ALT、 $\gamma$ -GTP、空腹時血糖、HbA1c、血圧）においては、ほぼ全年代で女性より男性の方が高値で要観察以上の割合も多い（表7）。最も有所見率が高いのは脂質異常で男性50.7%、女性39.8%であった。男性は40・50歳代を中心に肥満度、中性脂肪や $\gamma$ -GTPが高く、4割近くに脂肪肝がみられる。飲酒のほか車利用や不規則な生活などが原因と考えられる。女性は更年期を境にLDLコレステロールの上昇が顕著になり男性を上回る。

画像診断系の結果では、胸部X線・CT検査における有所見率は若干の増減がみられるが、要再・精検率は1.5%前後で変わらない（表7、9）。胃部検査の結果については胃内視鏡検査の実施数が増えてきているため、今回からX線検査と内視鏡検査を分けて集計した。胃内視鏡検査では、成人胃の多くに存在する慢性胃炎が確認しやすく、X線検査ではわかりにくい逆流性食道炎も診断できるため、有所見率は高くなる（表7、11）。腹部超音波検査では（表8）、各臓器（胆のう、肝臓、腎臓、膵臓）とも女性に比べ男性で有所見率が高く、特に脂肪肝は男性38.7%にみられ女性15.4%に比べ2.5倍であった。その他、胆のうポリープ（17.3%）、腎石灰化（22.4%）、腎のう胞（20.1%）、肝のう胞（14.8%）、大動脈石灰化（26.6%）が頻出所見である。安静時心電図所見内訳（表10）は例年とほぼ同じ傾向であり、各所見とも男性に多い傾向がみられる。

平成27年度から個人対応と事後フォロー充実を目的としたシステムを導入し、事後フォローの範囲や頻度を増やした（表12）。再精検や受診の確認や勧奨の充実により、「健診の受けっぱなし」を減らすとともに、健診後の受療状況確認をより正確にできると期待される。また、受診者と健診機関との双方向の通信手段にもなるので、個人対応のツールとしても有効活用していきたい。

関係の集計表は123頁に掲載